

【実践事例（8）】

（気仙沼市立大谷小学校）

地域の災害特性に関する児童の学びを地域住民等と共有

学校の状況

- 東日本大震災では、津波が校舎1階まで浸水した。
- 学校のある大谷地区の沿岸地域では、津波の被害が大きかった。

取組の概要

3年生以上の児童が、学年ごとに学習した、地域の災害特性に関する学習の成果を、保護者や地域住民、関係機関等に発表し、災害への備えなどを共有した。

「地域と災害特性を共有する防災発表会」

■3から6年生が、総合的な学習の時間で学んだことを発表

[3年生] 学校での避難の仕方を考えよう（校内の防災マップ）（10時間扱い）

- ・大谷小学校が過去に受けた災害について学び、グループで校内を調べて作成

[4年生] 災害の伝承について考えよう（伝承ポスター）（20時間扱い）

- ・気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館の訪問等を通じて作成

[5年生] 大谷の防災について考えよう（学区内の防災マップ）（28時間扱い）

- ・地域探検、学校周辺の地形や標識の調査、地域住民のインタビューにより作成

[6年生] 「災害」自分たちにできること（東日本大震災の被害や防潮堤の役割）（10時間扱い）

- ・大谷里海づくり検討委員会などの協力を得て学習

■参加者：保護者、地域住民、市防災担当者、
市内学校防災担当者、大学有識者等

【児童の感想】

- ・どんなときも命を守るために自分で考えて行動することが大切。
- ・自分だけでなく、みんなの命を守れるように、学んだことをこれからも周りの人に伝えていきたい。

【保護者の感想】

- ・保護者や地域に防災の取組がダイレクトに伝わったと感じる。地域や家庭との連携とともに、次代への伝承という面でも、地域に果たす役割が大きいと感じた。
- ・東日本大震災時の大谷地区の被害を忘れることなく伝えていくために、大谷の先生方や地域の方々が真剣に取り組んできた成果を感じた。6年生は、震災時に生まれていた最後の世代として、今回学んだことを覚えてほしいし、伝えてほしい。

